

審査講評

この講評は第二次審査に残った7者のうち、技術提案書の公開を承諾いただいた6者について、選定委員会で議論された内容に基づき、審査委員長責任でまとめたものである。

香山壽夫建築研究所（最優秀者）

まず評価したいのは、業務実施方針の冒頭で述べられている設計姿勢である。多くが選挙公約的な一般論に留まっているなかで、最優秀者は明確な独自の設計姿勢、あるいは設計哲学とも呼べるような姿勢を明らかにした。「単に庁舎をつくるのではない、様々な課題に取り組み、まちづくりに協働する設計組織体制」という見出しの言葉、取組方針ではさらに踏み込み「設計者による作品性を重視した一方通行的な設計は決して行わず、専門家として快適で機能的な空間の提示に徹し、設計者／町民／職員が三位一体となる体制を確立する」と述べていて印象的だった。これは具体的にも、意匠担当者が常駐すること、まちづくり景観の主任技術者を置くこと、町内4地域の特徴への言及や詳細なワークショップ計画に表れている。本提案者への評価は、2次審査のプレゼンテーションでの語りや質疑での答弁により高まった。とくに役場委員からそうした感想が聞かれたが、それは以上の姿勢が共感をもって受け止められた結果ではないかと思われる。

提案内容を見ていこう。サイトプランは単なる敷地内の配置や動線の計画ではない、周囲の町並みとの関係を記述した「なぜこの町並みの中にこう配置されるのか」分かる図になっていて、三方に顔を向けた優れた計画となっている。庁舎正面の駐車場は緑化駐車場としていて、駐車台数という機能と、ランドスケープへの配慮を両立させた現実的な提案として評価された。西庁舎は町民協働のまちづくりの場として積極的な提案が為されている。将来取り壊した時どうするかという質問が出たが、改修すれば長く使えるのでそれを勧めるという答えは、かえって役場委員を納得させたのではなかろうか。

新庁舎は南東に正面を向けたガラスの箱で、中央の執務スペースをコの字にカウンターが囲み、周囲から町民がアクセスできるプランとなっている。季節の良いときは明るい庁舎となろう。また地吹雪の冬は、荒れ狂う冬の厳しさがより実感される空間となるだろう。階段や水まわり、個室群を北西に集めたプランは、省エネルギーというテーマに対し妥当な解と評価された。各フロアを有機的につなぐ吹き抜け空間に対し、エレベーターが1基しかない動線計画には疑問もあるが、階段等を配置することで容易に改善できよう。

さて一方、本提案は一次審査のときから疑問点の指摘があった。巨大な「つばさひさし」

は何のためにあるのか、必要なかという疑問である。提案者は二次審査において、庁舎建築の英語圏での呼称である city hall に言及し、町役場の原点は行政機能を担う以前に「人々の集う場」という役割にあると主張した。確かにこの「つばさひさし」は、北側の表町と南側の住宅街を結ぶ「みんなのみち」に行き交う人々を受け止め、町民の新しい「心のよりどころ」を生み出す象徴的な意味合いを持っており、これ無しでは提案者の一番重要な主張自体が成り立たないほどに本質的なものである。しかしながら機能的にみれば、風の強い庄内町では雨や雪に対し、高い位置にある「つばさひさし」は役に立たないし、底上への積雪にどう対応するのかという問題も抱えている。機能面に関する質疑での回答は、陽ざしを防ぐことと、風の流れを引き込み加速させる効果により、各階の窓から空気を誘引し換気を図るという説明にとどまった。すべての委員がそれで納得したと思われないう節もあるが、提案者自身が、これは検討が必要で変更もあることを示唆し、また提案者の主張の1つが町民、職員との話し合いの中で設計を進めるということであるので、それが支持に結びついたと思われる。

本提案は課題を的確に押さえ、また新庁舎自体は長方形の平面をした直方体という、今後修正しても融通の利くおおらかな構えをしたものであるため、そして協働で設計を進めますという設計姿勢もあって、最終的に多くの委員の支持を集めたのではないかと推察する。その意味では、作品ではなく人を選ぶというプロポーザルの趣旨に適った選択であったように思う。

設計・計画 高谷時彦事務所 (次点者)

最優秀者と次点者はともに優れた提案として最終的には2者にしぼった検討が行われた。そこで初めに両者と他の提案者との違いを述べておこう。それは業務実施方針の基本的な設計姿勢にすでに表れている。我々が次点者で注目したのは、住民共働の場として再生するという西庁舎の位置づけ、庁舎に限定せず地域の環境づくり、表町のまち並み整備にも係るという点であった。また、「庄内町らしさを直接形に追い求めることはしません。私たちは地域との繋がりを意識した庁舎づくりを行うことで自然に出てくる庄内町らしさを創造します」という一節も重く受け止められた。以上は具体的にも、まちなかの空家を借りて模型を展示し、打ち合わせやワークショップ、情報発信の場として活用するという「まちなかデザインハウス」のアイデアや、詳細なワークショップ・スケジュール、まちづくり拠点施設としての西棟の様々な利用提案に表れている。

設計内容に移ると、まずサイトプランは、表町の歴史的な町並みを重視するという宣言

通り、北側の表町と南側の住宅地、双方に顔を向けたタウンモールを設けるという優れた設計になっている。また、現庁舎の建設後に建てられた保健センターや図書館などがバラバラに繋がりにくく配置されていた課題に対し、「まちに対して構える」のではなく「まち並みをつくる新しい庁舎」が建つことで、繋がりを持った群造形としての行政文化ゾーンが創出されるという説明も説得力があった。

平面計画は、改修する西庁舎と同規模に新庁舎を分割し、間の空間を入れることで等間隔に3棟が並ぶという優れた解き方をしていて、これが群造形を生み出す所以となっていて高く評価された。ほとんどが2階建て以下の既存の街並みとも無理なく調和する、比較的小さく分節されたボリュームに基づく造形は、スケッチから想像される具体的イメージとしても、すべての案の中でもっとも違和感なく、受け入れやすいものであった。

間の空間である「ひろま」を客だまりとして、両側（中棟、南棟）の執務スペースが囲んでいるレイアウトは機能的であると評価されたが、トップライトを持つ吹き抜け空間である「ひろま」は、本提案の目玉と考えられるものの積雪時の心配、あるいは空間自体としても大きな評価を勝ち得るには至らなかった。立面の大きな構成要素となっている「壁ルーフ」についても、西庁舎を含めた施設全体に一体感と調和をもたらす効果が期待される一方で、地元の高い板金技術を用いるというだけではイメージが湧きが多く、多くの委員から評価されたとは言い難い。

羽田設計事務所

技術提案書は密度の高いプレゼンテーションとなっていて、そこから伺われる意欲も含め高く評価された。とくに町民・地域住民、まちづくりの関係者とともに、3回のワークショップを行いながら進めるという設計プロセスや、西庁舎を公民協働の場として再生するという提案は、具体的な記載が評価された。歴史的街並みに想を得たというルーバーによる外観も魅力的である。一方、余目まつりのコラージュが印象的な大屋根の「ひろば」については評価が分かれ、必ずしも多くの委員の賛同を得られたとは言えない。表町の歴史的な町並みをつくっている北側の道からのアプローチがなく、道路際が職員駐車場となってしまうのは、歴史的街並みを評価する姿勢と矛盾し疑問が呈された。

さて、完成度高く見える本提案が最終2者に残れなかったのは、平面計画における基本的アプローチに対する疑念からである。本提案では執務スペースがコの字に諸室で囲まれ、北側を除いて直接外部と接することがない。したがって執務スペースは人工照明、機械換気に頼ることになる。これは庁舎等整備基本計画にある省エネルギー化の実現という基本

理念と合わないし、評価の着眼点にある省エネルギー化や自然エネルギーの活用による環境負荷低減というテーマとも合わない。外側に配置された諸室のうち、南側に倉庫や更衣があり、西日のあたる位置に町長室や応接室があるのも感心できない。また、ルーバーによる外観が有効なのは、大面積の採光を必要とする執務スペースや町民ロビーなどだと思われるが、ここでは倉庫や更衣、WC などとなっていて、ルーバーとの取り合わせも疑問だった。

ジェイアール東日本建築設計事務所

3番目に評価した委員の多かった提案であり、密度の高いプレゼンテーションが評価された。「みんなの広場」は、応募11者のうちで唯一の庭園あるいは公園的な空間であり魅力的かつ独創的だが、その分駐車台数は少なくなると思われる。庁舎の配置は、北側の昔からの街並み、南側の新しい街並みの双方にとの関係から向き、位置を決めたということだが、歴史的街並みに面して駐車場が並ぶ配置計画となっているのは残念である。まちづくりの拠点施設というテーマに関しては「土縁ひろば」に魅力的な提案が見られるものの、他者の提案にある西庁舎の活用や、設計プロセスでの町民参加などの記述は弱かった。

本提案の目玉となっているのは、トップライトと木質ハイブリッド集成材の梁が交互に光と影を落とす「土縁ひろば」であり、そこからピロティを通して見える、また繋がる「みんなの広場」の緑だろう。これらの要素は建物内外に都市的景観を生み出し、新しいまちづくりの中心になりそうな期待感を感じさせる。ここに惹かれた委員も多かったと思われるが、議会エリアと行政エリアの間であって谷となり、雪の吹き溜まりとなる恐れもある。

さて、本提案が疑問視された点は以下にある。それは行政エリアで、南北にコアを配置した両側コア形式を採用したため南側が壁になり、更衣やWC となっていることである。その結果、執務室は「土縁ひろば」やその向こうのピロティを介してしか通風、採光を得られない。2階以上は西から通風、採光を取ることだが、西日に頼るのはどうしたものか。これは省エネルギー化や自然エネルギーの活用による環境負荷低減というテーマに相応しくないと判断された。

楠山設計

南側からのアプローチに正面を向けた堂々としたサイトプランだが、北側の歴史的町並みが裏になってしまっている。北側の表町から入ると、車庫の間を縫うようにアプローチすることになる。また、西庁舎と新庁舎があまりに接近しすぎていて、採光などの問題が

起きないかという疑問が呈された。設計プロセスへの住民参加や、まちづくりの拠点施設という視点の記述は弱い。また、西庁舎の改修案が簡略なものしかなく、ほとんど見られないのも問題視された。

平面計画は執務スペースと待合スペースを南面させ、その点で方位としての問題はないが、積極的な魅力も見られないという意見があった。耐震要素となりうるコアが北側に集中しているため、構造的にみて平面計画の合理性に疑問があるという指摘、新庁舎が西庁舎に対して背を向けているという指摘もあった。また、鞆がけ造りを内部のモチーフとして使っているが、本来、風雨からの外壁保護のための鞆がけを内部に使うのは、機能から遊離したデザインではないかという疑問の声もあった。

鈴木弘人設計事務所

技術提案書の密度がここまで残った他者と比較すると薄く、西庁舎も会議室が並んでいるだけに見えてしまう。ただ要点はよく押さえられており、提案内容のバランスの良さから評価は高かった。

サイトプランは三方に顔を向けていて評価できるが、最優秀者や次点者の提案に比べると、「みんなの広場」の入り口が北側と東側のアプローチに偏っている。南からアプローチすると駐車場の周りをまわらされることになる。しかしながら「つながる広場」の週末イベントは他者にはない提案で、これはすでに現在、商工会館の駐車場で週末に産直市が開かれているから、可能性がある。

平面計画は南側に執務スペースをとるオーソドックスな計画で、待合スペースである「みんなの広場」が北にまわっている。ここは西庁舎との間の空間で二層吹き抜けであり、トップライトが設けてある。西庁舎への採光の心配が指摘されたものの、概ね好意的に評価された。

冷暖房システムはガス・ヒートポンプとだけあるが、今回の提案には輻射の提案が多く見られ、それと比較すると見劣りがした。

以上。

最後に、本プロポーザルに参加された皆様に感謝申し上げますとともに、今後の益々のご活躍を祈念して御礼申し上げます。

庄内町役場本庁舎等整備事業基本設計

公募型プロポーザル選定委員会 委員長 温井 亨